

鴨下上皇太神宮の御社は、天武天皇白鳳五年の造営にして、下の社御祖の神は加茂建角命の御娘玉依姫にてまします。ある時瀬見の小河のほとりに遊び給ふに、丹塗の矢ひとつながれ来りしを拾ひ取り、屋のうへにさし置、しばしへて孕身となり、終にをのこゝをまうけ給ふ。一日里人をあつめ宴を催し、杯をか男子にあたへ、汝が父にさし給へといひ聞せ侍るに、盃を虚空になげうち、神とあらはれ天に昇り給ふ。是なん上の御社別雷太神宮なり。丹塗の矢は火雷命なり。「松尾大明神是なり」葵祭は卯月中の酉日、欽明帝の御宇に始る、大内より御車出て、公卿みなく騎馬にてあふひかづらをかけ、音楽を奏し、其儀式嚴重にして美麗の行粧他にならびなき祭礼なり。「まつりとばかりいふはあふひ祭のことなり」

みあれに参りて社の司おのくあふひをかけけるによめる

新古今

跡たれし神にあふひのなかりせば何に頼をかけて過まし

加茂重保

五月五日の競馬は、いにしへ大内裏武徳殿において騎射の事あり、此例によるとかや。朔には足揃あり、神官達黒赤の装束を着し、左右に別れ、勝負楓とて馬場の左にあり、是より中にて落たると乗おくれたるとを負とす。六月十九日より晦日迄は夏越祓とて、御洗川の辺に諸人遊宴するなり。晦日には上鴨の神前において猿樂あり。

新古今

鏡にもかけみたらしの水の面にうつる許の心とをしれ

此歌は加茂へもうでたる人の夢に見えけるといへり。

日蔭山ひかげ二葉山ふたばは、上鴨神殿の東にありて御生山みあれの別名なり。石川いしかは、瀬見せみの小川、鴨の羽川などは、皆みたらし川をなづくとかや。

続古今 君が代も我世もつきし石川やせみの小川の絶じと思へば 鎌倉右大臣

家集 降雪はみたらし川に影見えて空にぞすめるうと浜の声 定家

続後撰 さかのぼる鴨の羽川のその上を思へば久し世々のみづがき 前太政大臣

岩本橋本の社は、住吉和歌の二神とも、又業平実方なりひらさねかたの化現なりとも云伝ふ。吉記にいはく、平安へいあんの京は百王不易の都なり。東に巖神がんじんあり、西に猛靈をあほぐ、則巖神がんじんは鴨太神宮なり、猛靈は松尾の靈社はなり、二神の鎮護によつて、万代平安の福を蒙るも、此御神の威徳なりとぞ。